

---

## ロジャー・フライの「オメガ工房」再考

— 感性的「共同体」をめざす芸術実践の試み —

慶應義塾大学 加藤 明子

---

英国の美術批評家ロジャー・フライは、「第二回ポスト印象主義の画家展」閉幕直後の1913年春、自ら「オメガ工房 (Omega Workshops)」を開設した。当初の主な目的は、「ポスト印象主義」という最新の絵画様式を装飾芸術へ応用する試みにあった。第一次世界大戦勃発後は次第に活動内容を変化させ、児童の絵画展や劇の上演会など、幅広い活動を展開した。しかし、1919年には経営難のため閉鎖を余儀なくされた。

従来、オメガ工房は美術史において一定した評価を与えられておらず、その位置づけも未だに不十分と言わざるをえない。先行研究による評価の傾向は次の二つの立場に整理できる。ひとつは、オメガ工房を形式主義的な実験の場として捉え、マティスやピカソの様式を室内装飾に応用した先駆的な役割は評価しつつも、作品の実用性への配慮を欠くために近代デザイン運動の系譜には属しないと考える立場である。もうひとつは、末期的なアーツ・アンド・クラフツ運動と見なし、たんに既成品に彩色を施し低品質な工芸品を生み出したグループとして批判する立場である。

しかし、いずれも既存の芸術運動の判断基準に立った評価にとどまっていよう。この工房が手がけた活動は、新しい芸術形式を応用した工芸品の制作にとどまらない。それは、意図的に仕上げ工程を省いて作品表面に手の跡や模様のずれを残すような偶然的表現効果の重視や、素人や子供の自由な創意に新鮮な感性を見出そうとする姿勢など、独自の価値基準に支えられていた。こうした特徴は、フライが傾倒したトルストイの芸術論に、すなわち感性的交流を本質視する制作観に根ざしている。

本発表では、これまで十分に検討されてこなかった詩人シャルル・ヴィルドラックとフライの関係に注目し、1912年から1920年にかけての書簡など未公開資料の調査結果から、両者間の交流の経緯、およびアベイ派やロマン・ロランに対する関心の深さを明らかにして、オメガ工房の全活動の基礎となる理念を明確にする。この理念とは、開かれた芸術形式を通じてすべての人と感性を共有し「兄弟愛に満ちた団結」を実現することである。さらに、この理念が、ここで生み出された室内装飾品や陶器などいかに具体化され、また児童の絵画展や夜会オメガ・クラブなどの企画にいかに反映されたかを検証する。たとえば、《オメガの子供部屋》(1913)や《暖炉用衝立》(1913)には、自由な発想から生まれた協働の成果が認められる。また捺染布地《アメノフィス》(1913)や《オメガ陶器》(1914-16)には、仕上げに色むらや粗さを残すなど、万人に訴える直接的表現効果の追求が確認される。欧州大陸における同時代のデザイン運動と比較すると、オメガ工房がトルストイ的な芸術運動として、多様な芸術実践を通じて感性的な「共同体」を実現しようとした運動であったことは、より一層明確になる。